

「いのち主義」の時代的背景とその展望

上 田 紀 行

1980年代、日本で展開した、「いのち」への関心、森岡正博が「80年代生命主義」と呼ぶこの流れは、いかなる時代的背景を持って生まれたものであろうか。

本報告では、それを人類史における20世紀という時代の異常性と、現代日本におけるアイデンティティー危機という両面から捉えて、「いのち主義」の求めるものをその中に位置づけるとともに、その21世紀に向けての展望を明らかにしたい。

1. 20世紀の「異常性」

80年代「いのち主義」は、単に80年代日本社会をその背景に持つだけでなく、20世紀という時代がこれまで進んできた方向に対する、根本的な疑義と、それへの不安をその背景に持っている。

人類史的に見れば、20世紀は地球大の破壊と暴力の時代であり、前代未聞の「異常」な時代だったといえるだろう。

もちろん人間社会のある部分だけを取り出してみれば、20世紀は科学技術の進歩発展の偉大な世紀でもあり、輝かしい「近代」化の世紀でもあり、「豊かさ」の増大の時代でもあった。1960年代頃は、漠然とこの社会はどんだんいい方向、豊かな方向へと向かっていくように感じられたものだ。しかしその幻想は1970年代には既に息切れを見せるようになった。それに代わって、1980年代には地球の危機が取りざたされるようになり、そして21世紀まであと5年という現在、われわれはこの世紀を総括し、次の世紀の新しいパラダイムを創造しなければどうにもならないと感じている。たかだか40年という短期間に我々の意識はひとつの極からもうひとつの極へと大きく振れ、この世紀末に至って、20世紀の単なる延長が輝かしい未来をもたらさないことが共通認識として共有されるに至ったのである。

確かに、もしわれわれが月にいて、そこから地球という星を定点観測しているような立場だとしたら、この100年間にこの星に起こった変化はかなり痛々しいものに見えることだろう。

例えば人口の増加を見てみよう。そもそも人類が地球上に姿を現したのがおよそ400万年前だといわれている。そして推計では、100万年前の世界人口はおおよそ100万人だった。それが1万年前、つまり農耕が始まる時点で1000万人に増加する。10倍になるのに100万年かかったわけである。その人口は西暦元年にはほぼ1億人となる。この間の人口増加率は100年間で

およそ2%、つまり100年前に100人生きていた人間が、100年かかって102人になるという緩慢な増加であった。

その人口は16世紀に5億人に達する。そして300年で倍増して、19世紀のはじめに10億になる。この300年の増加率は1世紀で約1.3倍ということになる。そして、20世紀の始まり、1900年の世界人口は約16億人であった。(増加率、約1.5倍)

ここから20世紀に入るわけだが、人口は1920年頃に20億になり、次の40年で10億増加して1960年に30億に、20年後の1980年に40億、7年後の1987年に50億になり、2000年の推計人口はおよそ63億人である。20世紀が始まったときに16億だった人口が終わったときには63億。たった100年の間に約4倍に増加したのである。こんな急激な人口増加が起こった時代は歴史上まったく見あたらない。これはこの世紀が人口だけから見てもいかに「異常」な世紀であったかということを物語っている。

そして、人類のもたらした地球環境の変動も、この世紀の異常性を物語っている。人類はその時代ごとに地球の環境に変化をもたらしてきた。しかし、今世紀に起こった環境変動の規模は突出したものだ。森林の減少を例に取ってみても、人類が農業生産を始めた1万年前には地球の半分は緑に覆われていた。それが、1960年には森林面積は全地球の4分の1まで減少し、25年後の1985年には5分の1になっている。1日に失われていく森林の面積はおよそ1500万ヘクタール、東京23区の3分の2の面積の森林が毎日地球上から消えていく。そして森林を消失させているのは外ならぬ人間社会の営みである。その他、オゾン層の破壊や地球温暖化の例を引き合いに出すまでもなく、20世紀は間違いなく地球の歴史始まって以来の環境破壊の世紀であった。

何の主観をも交えず、この地球上に起こった変化を数字から統計的に見るだけで、この20世紀という時代は、人類史上たぐい稀な特異な世紀であったということが言える。20世紀後半に世界を席卷した政治的原理は「民主主義」といえるが、しかし、地球という星を天上から眺めたとき、そこには人類による独裁制が他の生命や星自体を痛めつけているという実相が浮かび上がってくる。民主主義を教条とする人たちは、他国の独裁制を見て、それが野蛮であり、人間の尊厳が失われていると非難したり、独裁制を支えている人たちが自分の利益になりふり構わず他を抑圧し、また洗脳教育によって非合理的なイデオロギーに国民を染め上げていると主張するが、その論理は地球という星における人類による独裁にもそのまま適応できるかもしれない。

人類による地球の支配、搾取は何も20世紀に始まったわけではない。それは農業革命から文明の成立に至ってかなり明確になってはいた。しかし、人類はそれを完全に遂行するための技術的レベルを長い間持つことが出来なかった。ところがその技術的側面が長足の進歩を遂げ、人口の増加という要因も合わさって、一気に地球に対しての破壊と暴力が噴出したのがこの20世紀という時代だったのである。

しかし、そうではあっても、20世紀は人類が「豊か」になった世紀ではないかと主張する人も多いに違いない。確かに、我々が住むこの日本社会に限っていえば、その物質的豊かさの水準は格段に向上したかに見える。

しかし、「豊かさ」を物質的な豊かさと限定するとしても、世界大に見れば、20世紀は人類全体が豊かになった世紀であるとはとても言えない。

例えば、国連食糧農業機関（FAO）のデータによれば、1988年の時点で、1日の最低食糧カロリー・栄養構成を満たさない農村貧困人口は、アジアで50%、アフリカで65%、中東・北アフリカで32%、ラテンアメリカで53%に及んでいる。先進国で、カロリーの取り過ぎから成人病を病んでいる人が後を絶たない一方で、途上国では最低限の栄養すら取れない人々が半数近く存在しているのである。

また、国連児童基金（UNICEF）の報告によれば、1980年代において、栄養失調やそれに関連した病気で命を失った子供の数は、1日平均4万人に上っている。これは約2分に1人の割合で、世界のどこかで子供達が貧困が原因で亡くなっているということであり、この章の始めからここまで文章を読んでいる間にも、既に何人かの命が失われているということになる。

果たしてこの状態を、「20世紀は人類が豊かになった時代だ」と総括できるのかどうかは極めて疑問である。それは、「人類の中で限られたほんの一部の人間が、物質的に豊かになった」時代なのであって、それを全人類が「豊かになった」と錯覚するのは、先進国に住む我々が、自国の世界のみを「世界」として認識する視野狭窄によるものでしかない。

20世紀はまた、科学技術の世紀だった。そしてわれわれはその恩恵を多大に受けているし、20世紀がこの人類史上、傑出した世紀であるという認識はこの科学技術の長足の進歩によるところが大きい。

しかし、科学技術の進歩は人類の精神史、生存の根底の問題にほとんど革命的な転換をもたらしたということも忘れてはならないだろう。それは大量殺戮兵器が生み出されたということであり、実際に、20世紀前半を締めくくる世界大戦は、核爆弾の投下によって終わりを告げたという事実である。この事態も人類史上いまだかつて無かった。

地球上の全人口を一瞬にして滅ぼしうる兵器を人類が持つに至ったということは、よくよく考えてみればたいへんなことである。「核」以後に生まれた世代にとっては、生まれたときからその状況はあったわけだから、そのほうが普通であり、別に驚くべきことでもないかもしれないが、この状況にしても、人類400万年の歴史の中で、たかだかここ50年の間に起こったことを「当たり前」と信じてしまう感性の中にわれわれがいること自体が、妙なことかもしれない。

「核」を含めた大量殺戮兵器を持っているという事実は、見逃せない意味を持っている。それは、人間の持つ「悪意」「憎悪」が大規模な暴力という形で発現する時代にわれわれが住んでいるということの意味しているからだ。人間の中には確かに悪意や憎悪が存在している。しかし、20世紀に至るまで、人間の悪意のおよぶ範囲は限定されていた。その意味では、「憎悪」の持つ問題は常に存在していたにしても、それが毒ガスで不特定の多数を殺したり、核爆弾で世界全体を滅ぼすといった規模の影響力を持ってはいなかった。しかし、20世紀にいたって、人類はその「悪意」「憎悪」「敵対心」によって、全人口をも滅ぼすことができるようになったのである。

人間の内なる「暴力性」と人類全体の滅亡の問題がつながってしまう時代、それが20世紀

だった。その意味では、人間の内面世界が地球大の大きさを持つ時代に至ったともいえる。現代を指す用語として、よく「心の時代」であるとか、「精神性の時代」であるとかいわれる。それは多くはポスト科学技術時代の用語として、反科学的、反物質主義的な流れで使われる。しかし現代における「心」を語るならば、それ以前に、むしろ科学技術が発達したことによって、内面的な「心」の持つダイナミズムが、地球全体の存亡にも関わる、外面的な巨大な力を持つに至ったことにも注目されなければならないだろう。

この20世紀末に生きている人ならば、これまで述べたような地球大の危機をどこかで感じとっている。それは一言で言ってしまうと、地球の、人類の「死」が現実の問題としてイメージされる時代になったということである。そして、その「死」に自らも関与しているということ、また、人間性に潜む暴力がその「死」をもたらすということ、明確な形ではなくとも、潜在的には意識している。平均寿命も驚異的に伸び、「生」を謳歌しているように見える20世紀文明には、確実に「死」の影が忍び寄っているのである。

2. 80年代—「差異化」と「相対化」

さて、現代が危機的状況を迎えているということは分かったが、そこで選ばれたキーワードが「いのち」であるということに注意が払われなければならない。現代の危機を解決するならば「政治」あるいは「経済」の分野も重要なはずである。しかし、結果的に政治や経済とは結びつくとはいえ、そこで「いのち」という言葉が中心的なシンボルとなることには、現代の危機のもうひとつの側面の考察が必要になる。

それは、現代の危機的状況は、単に政治や経済の分野だけに存在するのではなく、一人一人の個人の内的な世界にも起こっているということである。それは一言でいえば、アイデンティティーの喪失、自分が何者だか分からないという現象である。80年代とは「自分探し」が大きなテーマとなった年代でもあった。

「自分探し」は、人類にとって古来から不変のテーマだが、それがこれだけ様々なところで声高に言われた時代も少ない。それは裏返せば、どれだけ現代日本に生きるわれわれが自分自身が見えにくくなっているかということでもある。

それだけ自分自身を見えにくくしているものとは何だろうか。

それは、一言でいってしまうと、人間存在の相対化であるといえる。自分自身が絶対的な何者かであるという実感が持ちにくい時代が現代である。それは言葉を換えれば、自分自身を「かけがえのない」存在であると思えないということでもある。その相対化の背景には、差異化という現象がある。つまり、自分自身を他との差としてしか認識できないという、アイデンティティー認識である。

「差異化」には二つのタイプがある。第一は通時的な差異化、つまり「昨日の私」、「明日の私」との差として「現在の私」を捉えるというやり方であり、第二は共時的な差異化、すなわち同じ時代に生きる他者との比較で自分のアイデンティティーを確立するやり方である。その二つはともに重なり合って現代日本におけるアイデンティティー確立の方法となっているが、

より詳細に見るとそれらは日本の戦後の歴史にも重なり合っている。

70年代までの高度成長時代は、通時的な差異化がより優越している時代だったといえるだろう。つまり、今日の私は昨日の私よりも物質的に豊かになり、生活が向上していくという、時間的な差異化である。そこには、明日は今日よりもよりよい世界になるという「神話」が存在していた。

確かに経済が不断の成長を続け、所得が確実に増加していく状況下では、「今日の私」は「昨日の私」と比較することによってある種の安定した基盤を得ることができる。昨年よりも年収がどのくらい増加したかを考えるだけで、自我はある種の安定を得る。テレビを入手し、そのテレビが白黒からカラーに変わり、そのサイズもより大きなものへと変化していく。身の回りが次々と電化製品で埋められ、所有する「モノ」がどんどん増えていく。住まいも近代化され、通勤に使う電車は冷房化され、すべてがこぎれいなものになっていく。

もっとも、こうした経済成長は、個人の質的な豊かさを犠牲にしており、長時間におよぶ過酷な労働や、余暇時間の無視などを背景としていた。だから、もし「明日は今日よりも良くなる」という展望なしに同じ生活を送ることを強いられたならば、かなりの苦痛がもたらされたことだろう。通時的な差異化が前提とされないところでふと立ち止まって、「今の自分は幸せなのだろうか」と考え込んでしまえば、かなりの空虚感が襲ってきたに違いない。しかし、実際には空前の経済成長はかなりの期間持続し、われわれは明日の繁栄のために今を身を粉にして働くというライフスタイルを疑うことはしなかった。

しかし、この通時的な差異化によるアイデンティティーは80年代にはいと効力を失ってくる。

それは第一に、物質的な豊かさに関する飽和感が広がり始めたからである。だいたい身の回りの「モノ」は一通り揃ってしまった。これ以上モノを増やそうにも何を増やせばいいのかというわけだ。これ以上過酷な労働を続けても、そうそう生活レベルは向上しないのではないか、もう物質的な豊かさは頭打ちになってしまったのではないかという感覚が広まり始めたのである。

そして第二に、前項で述べた地球大の危機の認識がある。このままの成長を続ければ、地球は死ぬ。廃棄物が海にも陸にも空中にも蓄積し、自然は破壊され、人間も生存の基盤を失う。必ずしも「明日」が「今日」よりも良いというわけでないことが明らかになってきた。1979年のアメリカ、スリーマイル島での原発事故や1986年の旧ソ連、チェルノブイリ原発の事故は、単なる原発事故というにとどまらず、「明るい未来」が必ずしも約束されないという警告としても受け取られた。

第二の共時的な差異化は、「差別化」という用語で80年代中盤からのマーケティングにおいて商品の世界で注目を集めた。同じビールを違う形の容器に入れて他との違いを強調したり、電化製品にも他にはない機能を付加して他社との差を際立たせたりする戦略がそれである。それはこれまで述べたようにモノを獲得すること自体の飽和感が広がる中で新たな購買意欲を掻き立てるための戦略であった。つまり、商品の内容それ自体はほとんど変わらないものを、他との差に着目させることで消費者にとって特別な意味を持たせようとしたのである。つまりそ

ここではその商品の持つ意味は、それ自体の内容よりも、他との違いからもたらされることになる。

これと同じように、自分自身の意味は他との違いから来るという、共時的な差異によるアイデンティティーの確立もまた80年代に先鋭化したといえる。もっとも、他者との差から自分の位置が決まるというのは、人間社会における個人の「地位」をめぐる普遍的な現象であるから、それは80年代に始まったわけではない。しかし、その傾向が明確化され、表面化したのが80年代だということができる。

それが一番鮮明に現れているのが、教育の分野だろう。いわゆる「偏差値教育」、偏差値の導入である。偏差値とは、受験者の平均得点からの偏差を表す値だから、そもそも個人個人を相対化した尺度の中に置く装置であるが、その偏差値の教育への導入は1960年代の後半に始まり、1970年代に隆盛となって、「偏差値教育」との言葉を生み出すに至った。

教育には昔から競争がつきものであり、特に受験においては他よりも一点でも多く点数を取ろうとする競争原理が働いているわけだから、偏差値の導入はことさら変化をもたらすものではないと考えられるかもしれない。しかし、そこには微妙だが見逃せない意識の変容が存在している。

例えば一回一回のテストにおいても、そこで何点取ったかということよりも、その偏差値が問題になる。90点取ったとしても、受験者全体の平均点が92点ならば偏差値は50を割り込む。60点でも平均点が30点なら偏差値は非常に高いものとなる。これまでの「平和」な時代のように、「90点か、良くできた！」と呑気な父さんが誉めてくれる時代ではなくなったのである。絶対的な点数ではなく、相対的な偏差値が問題になるということは、常に「見えない他者」が意識されているということでもあり、常にその「見えない他者」との相対化が為されているということでもある。いい点数を取ることよりも、それによって相対的な位置を少しでも上げていくことが求められるようになったのである。

偏差値時代以前であっても、もちろん受験する学校の格付けはあったが、ある目標とする学校があって、そこへの入学を目指すというのが普通だった。しかし偏差値教育が徹底してくると、志望校は偏差値によって自ずと決定されてくるようになる。偏差値という相対的な位置づけがまずあって、その偏差値に見合う学校の受験が指導される。その傾向がいつそう強まったのが、1979年から実施された、共通一次入試であった。この方式の入試は、受験産業の介入も相俟って、「偏差値輪切り」体制を生み出す。つまり、各大学には、ある一定の偏差値の学生のみが集まることとなった。つまり、大学の校風であるとか、その大学独自の特色といった、内的要因よりも、単にどの程度の偏差値なのかという相対的な指標によって大学が選択され、そこに入学した学生にとって、その大学は単にその偏差値で入学できる大学だから入ったということになる。つまり、大学それ自体と自分自身の必然的な結びつきは非常に弱いものとなる。自分はたまたまその偏差値だったからその大学にいるに過ぎないのである。

こうした、自分の位置を他との比較からしか得られない、相対的な自己認識は、教育の現場のみならず、社会全体に広がっている。そしてその傾向に、「マニュアル社会」化が拍車をかける。些細なことまで決定されていてほとんど喜劇的とも言える学校の校則から始まり、仕事

の現場においてもマニュアル化が進行する。ファーストフードの店員がマニュアルどおりの対応をするのが一時期奇異なものとして取り上げられたが、それらは以前から接客業等で存在していた、おじぎの仕方から話し方までをコントロールするマニュアルのより徹底した形であり、それらのマニュアルはこと接客業に限らず、多くの業種に広がっていく。効率化による競争社会での生き残りにとっては、個人の内側からにじみ出してくる個性はむしろ阻害要因になる。マニュアルを忠実に遂行することが、組織としてはいざばん効率的なのである。

しかし、偏差値という相対的な値によって通う学校が決まり、その延長上で仕事の場も決まり、そこでは個性の発揮よりもマニュアルを忠実に遂行することが求められているというのは、人々は自分がなぜその場にいないといけないのかが分からない。

そこには「交換可能性」という問題が出てくる。同じ偏差値や学歴を持った人間で、そのマニュアルどおりに行動する人間がいれば、別に自分でなくても構わないわけで、自分は他の人間と「交換可能」であるということになる。自分がその場からいなくなれば、別の同じような人間がその地位を取って代わる。そして組織は何の変化もなく動いていく。

こうした、相対化され、マニュアル化されることで、一人一人が交換可能な存在になっている社会は、自分自身の「かけがえの無さ」を感じるができない社会である。なぜ自分がこの場にいるのか、なぜ自分でなくてはいけないのかが分からない。自分ならではの存在意義、自分自身の「かけがえの無さ」が失われてしまうのである。

さて、これまで見てきたように、80年代は、これまで機能してきた差異化によるアイデンティティーの確立が、壁にぶちあたった時代であった。明日の自分が今日の自分よりもよりよいものになっているという神話が揺らぎだし、一人一人の相対化が加速度的に進むことで、自分の存在意義が見えなくなってくる。

その「かけがえの無さ」の喪失は、70年代に進行し、80年代に入って顕在化してくる。そして、そこに「いのち主義」も起こってくるわけだが、もっとも、その二つの差異化への動きは80年代の終わりにもう一回息を吹き返すことになる。バブル経済がそれである。明日のほうが必ず今日よりも地価が上がる。投機によって、相対的な位置づけを上げていく。いや、その投機に参加しないと、相対的に貧困化するという恐れも手伝って、多くの人々がバブル経済へと走った。本来のファンダメンタルズに基づかない、共同幻想がもたらしたバブル現象とその崩壊こそ、内在的な意味付けを無視して、差異化の運動に突き進んできた時代の総決算だといえるだろう。

80年代に鮮明になったのは、通時的な差異化によっても、共時的な差異化によっても、われわれのアイデンティティーがもはや支えられなくなったということであった。そしてそこから、「いのち」それ自体の内在的なパワー、価値に着目する動きが立ち現れてくる。

つまり「いのち主義」は「いのち」について語っているようでありながら、その背後にはひとりひとりの深いアイデンティティーへの不安が隠されている。すべてが相対化されている世界において、疑い得ない、ある絶対性を持った「私」とは何なのか、その時「いのち」が、「常に変わらぬもの」「内在的なもの」として提出されてくるのである。

3. 21世紀の「いのち主義」に向けて

さて、これまでの「いのち主義」の背景に、地球社会全体の危機と、個人のアイデンティティー危機の両方が存在するというところまで見てきた。意識されているにせよ、意識されていないにせよ、「いのち」への着目は、その二つの背景に多くを負っている。地球全体の危機からは、「かけがえのない地球」が叫ばれ、外面的なアイデンティティー確立の危機からは、内在する「かけがえのないいのち」が叫ばれる。そしてその二つは、地球全体とわれわれひとりひとりが「つながり合ったいのち」として一体のものであるという論理によって接合される。「いのち」というイメージには、われわれの時代の抱えている根本的問題を根底から見つめ直させる力があつたといえるだろう。

その意味で筆者は「いのち主義」に対して、全体的には肯定的な評価を与えるものである。「いのち」というキーワードは、20世紀という異常な世紀の流れを反転させる動きを創り出す上で、感性的な大きな力を持つ。また、自らの内在的に目を向けさせるエネルギーを持つ言葉でもある。

しかし一方で、森岡らが主張するように、80年代いのち主義が、それ自体が自閉するロマン主義に陥る傾向がなかったともいえない。「いのち」という言葉の響きが感性的、情動的に大きな力を持つが故に、その響きに酔ってしまう傾向も見られたのである。

それは「いのち」という言葉が日本語としてわれわれを深いところから呼び起こす力を持っていることの両刃の刃であるともいえる。現代社会が「つながり合ったいのち」を分断し、「いのち」を抑圧する社会であることは間違いない。しかし、それは巧妙に構築されたシステムによる抑圧であり、その解体には現実的な戦略が必要とされる。人々が「いのち」に目覚めることは、もちろん大きな第一歩であろう。しかし、その後が続く現実的なプロセスがなければ、巨大なシステムは解体され得ない。けれども、「いのち」という言葉が力を持つが故に、その言葉でプロセスが停止してしまうという人々も少なからず存在した。

それは、前述のように「いのち」の発見が、アイデンティティーのシフトと密接に関連しているということにもよる。「いのち」の背景には二つの側面があるわけだが、そのバランスがひとりひとりの中で保たれているとは必ずしも言えない。自分自身の救済が極端に優越している人にとっては、自分自身の「いのち」の発見とアイデンティティーのシフトが導かれるだけで満足してしまい、その背景にあるシステムの探求とその解体にまで意識が回らない。また、自分自身への自己愛的傾向もそれに拍車をかける。そうすると、そこでの「いのち主義」は、自己満足的な内閉した世界に陥ってしまう。

また、「いのち」という言葉が何か深遠な響きを持つが故に、「いのち」を唱道する人たちの一部は、「いのち」に目覚めていないと目される運動家達などを「次元が浅い」と見下すような傾向も出てくる。それ自体がある種の差異化、差別化による論理構築なのだが、「いのち」が絶対的な「かけがえの無さ」の響きを持つが故に、その論理構造が「いのち」を特権化した新たな差別化の論理であるということには気づかれにくい。

「かけがえのないもの」「疑い得ないもの」「絶対的なもの」への希求は、前述のように相対化された世界においては、ごく自然なプロセスである。しかし、それは絶対的と認識されるが故に、社会的な場においては危険性も持っている。自分自身が「いのち」を絶対的なかけがえのないものだと思うところまでいい。しかし、その認識に基づく自分自身の行動が絶対的なものであるということまでもそれは保証してはいない。「かけがえのないもの」を実感しながらも、それに基づく行動は多様な価値に開かれている場において為されているという認識が必要である。そうでなければ、その行動はとてつもなく独善的なものとなり、「いのち」を抑圧する現代社会の価値体系の硬直性を批判しながら、自ら「いのち主義」という一元的な価値にすべてを染め上げていこうという自己矛盾に陥ってしまうだろう。

「かけがえのないもの」を実感しながら、しかし行動においては多様な価値をどう認めていくことができるか。それは、宗教多元主義が可能かどうかという問題とも同じ根を持っている。そして、宗教多元主義が21世紀の最も重要な課題であることを考えるとき、そこに提示されている問題は見過ごすことができない。

しかし、一方で「いのち主義」は、従来の排他的な宗教に対する批判も内包し、それを超えていく方向性を持っていることも忘れてはならないだろう。つまり、「いのち」というニュートラルなシンボルを置くことで、特定の神や精霊、超越的存在に「かけがえの無さ」を置いて、他の「かけがえの無さ」に対しては閉じてしまうようなあり方を超えていく可能性も「いのち主義」は有している。そして、そうした「開かれた」いのち主義こそがいま求められているのであって、決して閉じられた「いのち教」が求められているのではない。

「いのち」という言葉は、大変懐の深いイメージを持っている。その懐の深さ自体が「いのち」の魅力だということを認識すべきだろう。だから、「いのち」は東洋的なものであると規定し、西洋的なものを攻撃する武器として使ったりすることは、自分で自分の首を絞めるようなものである。そういった二元論的思考を超えていく可能性をこそ「いのち」は指し示している。内的には大きな力を呼び覚まし、自分自身にとっては「かけがえのないもの」として感知されるが、それは懐が深く、曖昧性を持っているということにこそ、「いのち」の「いのち」たる所以があるのである。

曖昧で、懐の深いイメージを「かけがえのないもの」として生きていくことができるか、それが問われている。

それは、「いのち」という言葉が直感的に体得され、大きなエネルギーをわれわれに与えてくれることを認めながら、なおかつわれわれが「いのち」について知っていることはわずかなことでしかないということを知ることでもある。常に多様性に開かれ、自分自身の「いのち」観を更新し、豊かにしていけるようなプロセスこそが求められている。20世紀という異常な世紀が終わりつつある今、そうした創造性の源としての、開かれた「いのち主義」こそが、21世紀への展望を開くことだろう。